ミラノ通信 30号

ミラノサローネ・スペシャル

発行日　2022年10月7日

発行者 富山・ミラノデザイン交流倶楽部

高岡市オフィスパーク 5
公益社団法人富山県デザイン協会内
TEL. 0766-63-7140

執筆　池田美雪
ミラノ在住デザイナー

ミラノサローネ - 世界に開かれた文化とスタイルの交差点

1961年に、イタリア家具工業製品の輸出を促進するために誕生した「Salone internazionale del mobile（ミラノサローネ国際家具見本市）」は、今年の開催で第60回を迎えました。コロナ禍により開催中止を余儀なくされた2020年、より多くの企業へ出展を促すために展示方法に工夫を凝らした昨年9月の特別展Supersaloneの開催。こうした特殊な時期を乗り越えながら、多くの人たちから大きな喜びと共にこの節目の年が祝福されました。

ミラノサローネ代表のマリア・ポッロが、これまでの軌跡を振り返り、今のサローネを語るプロモーションビデオを、こちらからご覧下さい。
youtu.be/NHzJkl2Q68M（英語字幕付き）

今年は、毎年開催されるミラノサローネ国際家具見本市、サローネ国際インテリア小物見本市、サローネサテリテに加え、Workplace3.0 、Eurocucina（サローネ国際キッチン見本市）と、キッチンの最先端テクノロジーを紹介するFTK（テクノロジー・フォー・ザ・キッチン）、Salone Internazionale del Bagno（サローネ国際バスルーム見本市）、そしてインテリアのためのデザイン製品、装飾的・技術的ソリューションを紹介する見本市S.Projectが開催されました。特別展として、自然に寄り添うデザインをコンセプトに「Design with Nature」が会場内にて、ミラノ市内の王宮では「La Scatola Magica」と題した劇場型インスタレーションも行われました。

初日の6月7日には、ロー・フィエラミラノ国際見本市会場の隅々にまで来場者が押し寄せる光景が見られ、今回の開催を長い時間待ち望んでいた人たちの熱気が満ち溢れていました。

今年の出展企業数は1,575社（その内、国外からの出展企業27%）、サローネサテリテ参加デザイナー600人、173か国から262,608人が来場しました。依然として世界的に厳しい状況の中にありながら、コロナ以前に近い来場者数が記録されています。

会場の初日の模様は、こちらのビデオからご覧ください - youtu.be/zDmct9-Wefc

撮影 FRANCESCO RUCCI

初日6月7日には、ロンバルディア州知事、ミラノ市長らを迎え、テープカットが行なわれました。

見本市会場のすべてのホールを使った総計20万平米にわたる会場内では、出展企業それぞれが、創造力の限りを尽くした製品展示を繰り広げました。これらの展示設計にあたり、今年はミラノサローネより、サステナビリティに関する基準が盛り込まれた一連のガイドラインが発表、配布されました。そこには、再利用可能な素材、リサイクル素材、環境負荷の低い素材、FSCやPEFC認証の使用、素材供給元の物流面での持続可能性の検討、ブース設置時の環境安全性の高い製品や機材の使用などが推奨されています。資源の無駄を省き、ブースを構成する部品の再利用や廃棄方法を念頭において選択することの重要性が示された形です。

どこの通路を歩いても、それぞれの個性を存分に発揮するブースが延々に続きます。特に熱気が感じられたエリアは、FTKと言えるでしょう。プロのシェフ達が最新の製品を実際に使いこなし、来場者たちへ

試食を提供する様子がそこここで見られました。コンロの主流がミニマルなデザインのIHになった今、使いやすさや、料理の出来栄えなど、見た目からは答えを得られない疑問を、実演が一気に解消してくれるデモンストレーションです。コンロ以外でも、オーブンや換気扇、収納の照明システムや開閉方法など、次代のキッチンの最新機能を丁寧に説明するブースが多く見られました。

その中でも印象的だったのは、Electrolux社がリリースするグリーンなキッチンプロジェクト「GRO」。食べる行為を、私たちの健康維持からさらに、調理や食材の選択・購入などの広い範囲で捉え、持続可能な新しい食習慣を提案するプロトタイプの紹介です。ストックホルムを拠点にする非営利団体EATと、英国科学誌Lancetの国際共同プロジェクト「EAT-Lancet」が示す基準をベースに考案されたプロトタイプ「jewelry box」は、肉類以外からのタンパク質の摂取、クオリティの高い食材の選択を促すイノベーティブなキッチンシステムです。

NEWSROOM.ELECTROLUX.COM

Electrolux社が提案するグリーンなキッチンシステム「jewelry box」。

例えば、北欧で盛んな肉類の調理方法である燻製を、様々な味を組み合わせた野菜ベースのレシピとして、家庭でも応用できるシステムがその一つです。また、デジタルプラットフォームを使い、ユーザーの食習慣やそれが環境へ与える影響を分析し、個人的な目標を設定することができます。その他、レシピや地産地消食材について、また、ユーザーの好みに合わせたサステナブルな食材の選択などのアドバイス、さらに必要栄養量の計算、冷蔵庫に保存された食材のリストなどを提供してくれます。

FTKの会場風景は、こちらのビデオからご覧ください - youtu.be/WE3gCf8o98c

キッチンとバスルームのそれぞれのホールでは、企業の展示に加え、ADI Design Museumとのコラボレーションにより、「Design in the Kitchen」と「Design in the Bathroom」の２つのエキシビジョンが併催されました。住居の基本的空間であるキッチンとバスルームの歴史を、60年の間にコンパッソ・ドーロ賞・名誉賞を受賞した250点の作品を通して振り返る企画です。

キッチンのカテゴリーでは、50年代の実験的な作品を出発点に、現在に至るまでの食卓用家具、キッチン什器・電化製品、調理器具、食器のデザインから、食に関連する技術的・文化的な変遷が浮かび上がります。バスルームのカテゴリーでは、蛇口、温水器、洗面台、サニタリー、サウナ、バスタブ、暖房機器のデザインが、イタリアの暮らしの中で水を中心とした衛生の質をどのように向上させてきたかを物語ります。

撮影 LUCA FIAMMENGHI

EuroCucinaの会場で併催されたエキシビジョン「Design in the Kitchen」の様子。

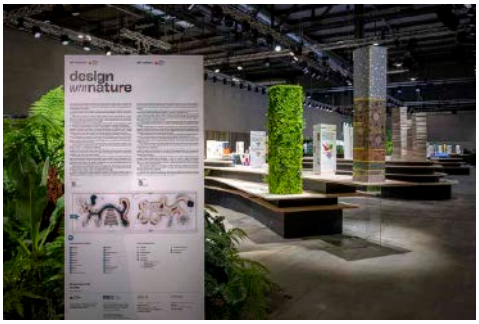
日本からも、今年は数社が出展し、その内の一つ、S.Project内にブースを構えた京都西陣織のテキスタイルブランド「HOSOO」を訪れてみました。伝統的な西陣織の技術を継承しながら、革新的な技術と普遍的なデザイン感性を絡み合わせた独自のテキスタイルを生み出し、国内外のラグジュアリーマーケットに向けて展開しているブランドです。今回の展示で、シルクとヘンプのコンビネーション特有の質感を、ブランドならではの複雑な構造による立体的な表現で織り上げた新作コレクション「Heritage Nova」を発表。これまで布幅30-32cmで織られてきた西陣織を、独自の織機の開発によって、世界の標準布幅150cmで織ることを可能にしたそうです。海外のクリエーターとのコラボレーションにより、日本の伝統技術と西洋の創造性を融合させた西陣織のイメージを一新するテキスタイルや、和紙を極細に切り、繊維として使う技術なども、大きなインパクトを与えます。今年11月に海外初の拠点となるHOSOO Milanoをミラノの旧市街ブレラ地区にオープンする予定とのこと。

WWW.HOSOO-KYOTO.COM

京都西陣織のテキスタイルブランド、HOSOOのブース。

「Design with Nature」- 自然に寄り添うデザイン

環境保護に関わるテーマに焦点を当て、15ホールのS.Project内で「Design with Nature」が併催されました。キュレーターは、ミラノ通信前号で紹介した建築家Mario Cucinella。自然と暮らしの関わりについて考察し、生態系の変遷、地球の最小単位としての住居、鉱山のように資源にあふれる都市、という３つのテーマを軸に展開された大型のインスタレーションです。有機的な形状で設計された空間には、トークイベントのためのスペースも組み込まれ、関連書籍が並ぶコーナーも設けられました。この企画の興味深い点は、都市生活からすでにリサイクル可能な多くの資源が排出されており、それらの資源を再利用することで循環経済システムを都市単位で生み出すことができるという発想、そして、自然から作り出される新素材をデザインの知識、スキル、技術へ結びつけることで、自然に対する新たな敬意を通じて生活を向上させることができるという考え方です。すでに工業化されているサステナブルな新素材として、魚の皮、セルロースとコルクの廃棄資源、キノコの菌糸体、コーヒー、バナナの葉などの有機物から作られた素材と、プラスチックやポリウレタンなどの合成素材をリサイクルした素材が、それぞれの特性を詳細に説明したパネルと、それを使用して実現された製品の展示を介して提案されました。



WWW.FURNISHINGIDEA.IT

「Design with Nature」の会場風景。新素材を使った製品もパネルと一緒に展示されています。

「Design with Nature」と「S.Project」の会場風景は、こちらのビデオからご覧ください - youtu.be/gbcyKe-OP7E

第23回サローネサテリテ - サステナブルでインクルーシブなデザイン

サローネサテリテの展示空間は、前回の開催までメインゲートから最長距離に位置する一番奥のホールの中、若干分かりづらい場所に配置されていましたが、一般を含め毎回多くの来場者を迎え入れていることを反映させたのでしょう。今回はメインゲートのそばにある、1＆3ホールへ設置されていました。ここから発せられる若者たちのメッセージとエネルギーが、より多くの人たちに届いたことと思います。

撮影 LUDOVICA MANGINI

広場を起点に広がりを見せるサテリテ会場。

今年は、「DESIGNING FOR OUR FUTURE SELVES」(私たち自身の未来のためにデザインする）がメインテーマ。世界48か国から学生を含め35歳以下の600名の若手デザイナーの作品が選考を通過し、展示に至りました。その中でもキプロス、コンゴ、キューバ、ナイジェリア、カタールの5か国は、新規参加国としてカウントされています。大きな広場２つを中心に、一部ブースの並びが斜めに配置された会場構成は、いつもとは違う流動的で新鮮な空気を感じさせます。

そして、以下の3点が今年のサテリテアワードに選ばれました。

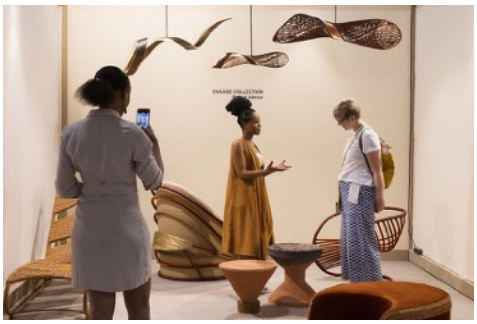
一位に輝いたのは、ナイジェリアのデザイナーLani Adeoyeがデザインした「RemX」。障害者やお年寄りなど、歩行補助器具の使用者へ尊厳と力を与え、手元に置いておくのに心地良く、喜んで使うことができる器具をコンセプトにデザインされた作品です。万人の役に立つものの中に、エレガンスと尊厳をうまく組み合わせている点、自国のローカルな加工技術とグローバルな視点を融合させ、それがコンテンポラリーな職人加工技術の一例となりうること、また、鋭利でありながらもシンプルな方法を用いて、今回のサテリテのテーマ「Designing for our future selves」へ呼応している点が評価されました。

二位は、ベルギーのデザインスタジオStudio Gillesによる「Lamps」が獲得。かぎ針で編んだVHSカセットテープのランプシェードへ石膏を溶かし、これら２つの技術を融合させて生まれる一点ものの照明器具。このプロジェクトは、遊び心、職人性、デザインを組み合わせることで私たちの記憶を呼び起こ

し、美しく機能的な作品に仕上げたこと、そしてサステナブルな素材と加工方法を用いたことが評価されました。

三位を受賞した、セルビアのデザイナーDjurdja Garčevićの作品「Meenghe」は、廃棄タイヤの削くずをリサイクル素材として活用し、ゴミ箱、植木鉢、スツールなどのストリートファニチャーをシリーズとして制作したもの。親しみのある素材を活用して、製品のライフサイクルをできる限り伸ばすために考えられた応用範囲の広いプロジェクトである点、一般に理解されやすい、サステナブルで美しいデザインであることが評価されました。

会場内では、沖縄県立芸術大学の工芸専攻科の学生たちが制作した、沖縄の伝統的な織りに現代的なグラフィックを組み合わせたテキスタイル、サーフェイスのデザインなどインテリア関連のデザインをジャンルを超えて手掛けるCosmographies工房（www.cosmographies.com）の、カラフルでポエティックなグラフィックで彩られたテラコッタのタイル、インドのBombay Atelierが自国伝統のアイスクリームにインスピレーションを得て、職人と共同で制作したKULFIサイドテーブル（www.bombayatelier.com）など、完成度が高く、理屈抜きで良いと感じさせる多くの美しい作品に出会いました。



撮影 LUDOVICA MANGINI

一位を獲得したナイジェリアのデザイナーLani Adeoyeの展示ブース。

撮影 LUDOVICA MANGINI

Studio Gillesと、すべてが一点ものの「Lamps」の数々。

WWW.SALONEMILANO.IT

廃棄タイヤを活用してデザインされた、ストリートファニチャー。

「La Scatola Magica」

ミラノ市内では、大聖堂の南側に面したミラノ王宮のカリアティディの間で「La Scatola Magica」が同時開催されました。11人の映画監督が、システム、コミニュケーション、ノウハウ、若さ、感動、起業など、ミラノサローネを象徴する11の言葉を、ショートムービーの形式で表現する劇場型ビジュアルインスタレーションです。アートディレクターDavide Rampelloが空間構成を含め、一つの作品に仕上げました。

撮影 ALESSANDRO RUSSOTTI

大型スクリーンの映像と音に圧倒される空間。

王宮2階までの長い階段を上り、歴史を感じさせる重厚な調度品やフレスコ画に装飾された数々の広間を通り抜け、ようやく会場に。天井高6m、奥行き24mの広々とした空間の壁面には、この広間の名前の由来である40体の女像（カリアティディ）が並んでいます。両壁面に大型スクリーンが設置され、ジャズをバックミュージックに、静止画と動画をダイナミックかつ刺激的にコラージュした映像が投影されます。ショートムービーには、家具業界におけるイタリアの優れた発想力やデザイン性、そして卓越したノウハウの豊かさを讃え、ビジュアルを通してミラノサローネのクォリティを全世界へ伝える、という使命が託されています。

日刊紙il GiornaleによるDavide Rampelloのインタビューの冒頭で、いくつかのショートムービーを含め、会場の様子が紹介されていますので、どうぞご覧ください youtu.be/uex5ARcjVVM

Fuorisalone - 「空間と時間」変遷する未来をデザイン

昨年9月の開催規模はかなり縮小され、国外からのビジターも限られていましたが、それをバネに、今年は800を超えるイベントが市内各所で開催され、街中がとても華やかで活気に満ちた6日間でした。

ところで、フォーリサローネの特別な楽しみが何か、ご存知ですか？それは、普段は入ることのできない空間を体験することです。ミラノの旧市街の道は石造りのファサードに挟まれ、無機質な印象を受けますが、航空写真を見るとミラノがとても緑の多い街だと気がつきます。実は、中庭を囲むミラノ独特の建築様式から生まれる、美しい庭園の中に緑が隠されているのです。フォーリサローネは、こうした庭園や歴史的な建造物の内部などを、心置きなく楽しむ絶好のチャンスです。

この特別な楽しみを求めて旧市街にターゲットを絞り、5vie地区とBrera Design Districtを主に見て回りました。5vieがカバーする地域は、東の大聖堂から西のS.Maria delle Grazie教会まで、東西南北に約2km四方に広がります。5vieの本拠地が置かれている美術工芸促進協会（SIAM）の辺りは、ローマ時代の遺跡もいくつか残っており、この地域からミラノの街が発展したことを物語っています。本拠地からまがりくねった細い石畳の道を通り抜け、メインストリートに面したHOTEL ARISTONで思いがけない景観に出会いました。彫刻展「The Absolute Surface」が開催されたルーフテラスから、ミラノの街が360度見渡せるのです。周囲に密集している屋根の煉瓦色が、中庭やルーフテラスに生い茂った緑とカラーコントラストを描きます。ミラノ生まれの建築家Aldo Rossiが、彼の設計する建築物に好んで使っていたツートーンカラーを彷彿させます。すぐ近くにTorre Velascaが、遠くにはZaha Hadid Architects設計のGeneraliタワーも見え、遥か遠くに、まるで要塞のように平野を囲むスイスとの国境に横たわる山脈が見えます。ミラノと周辺の地理的関係を初めて実感した瞬間です。

5vieのもう一つの拠点Cesare Correnti 14では、ベルリンで活動する女性デザイナー11人のグループMATTER of COURSEがデザインした、家具や照明器具のエキシビジョン「ICHundDU」、ミュンヘンのデザインスタジオMarkus Benesch Createsによるエキシビジョン「Show your Colors」のファニチャーシリーズがパワーを放っていました。後者は、様々な木材に鮮やかな色彩のプレキシグラスを極めて精巧にはめ込んだキャビネットやテーブルなど、ポップでありながらエレガンスも感じさせる、強烈な印象を与える作品群でした。（www.markusbeneschcreates.com）

暖かな木材と無機質なプレキシグラスが、サイケデリックな色彩で絡み合う作品の数々。

静かな路地に面したS.Bernardino教会では、「as it is. -equilibrium flower-」と題されたTAKT PROJECT（www.taktproject.com）のインスタレーションが、幻想的な空間を作り出していました。独自に開発したニット生地へ、部分的に熱を加えることで形作られた無数の白い花。外側に広がろうとする柔らかな花びらと、それを支える硬い構造の均衡は、外界と共鳴しながら花開く蕾の生命力に通じるものがあります。生花がそれを取り巻く環境と調和する様を、教会の厳かな空間で再現することを意図したそうです。

WWW.TAKTPROJECT.COM

TAKT PROJECTのインスタレーション。白い花々が心地良い波動で空間を満たします。

この教会のすぐ近くにあるインテリアデザイン事務所Takeda Katsuya Designでは、日本ブランドのエキシビジョン「Timeless innovation不易流行」が行われていました。建彦木工（www.tatehiko.jp）は、栃木県足利市を拠点に、さまざまな木工製品の企画・製造・販売を手がけるブランド。紹介されたいくつかの商品の中で特に目を奪われたのが、「山桜の弁当箱」と「彫る箱」です。無垢材を彫って作られたこの箱には継ぎ目がなく、まるで彫刻作品のような貫禄を見せていました。tempo（www.t-e-m-p-o.com）も足利市を拠点とする、モビールのブランド。複数の建築家・デザイナーがコラボレーションする作品は、パーツを組み立て

撮影 TAKEDA KATSUYA DESIGN

建彦木工の「彫る箱」。

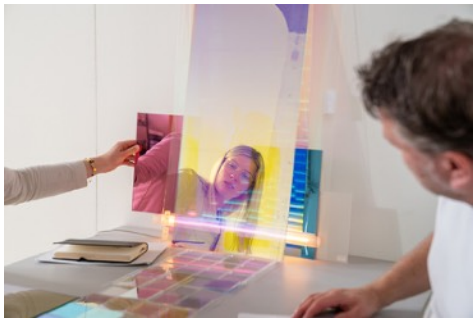
るプロフェッショナルにより、バランスを損なわないよう、ひとつひとつていねいに手作業で作られていきます。絶妙なバランスを保ちながら揺らめくモビール、建築的な要素とアートを掛け合わせた類稀なオブジェを見つめ、しばし時を忘れました。

Turati宮殿では、オランダのデザイナーや職人たちが「Masterly-The Dutch in Milan」と題した大規模なエキシビジョンを行ないました。エントランスをくぐり抜け中庭に入ると、色とりどりの蘭の花が迎え入れてくれます。両脇には、MILANOとROMAのアイコンをコラージュした2枚のユーモア溢れるタペストリーが掲げられ、微笑みを誘います。1階の中庭の回廊を囲むスペースでは、革新的な技術を導入した最新のデザイン作品の数々が展示され、それらの中でもデザインユニットSODALIME（@studio_sodalime）のミラーコレクション「Dichroic」が異彩を放っていました。ガラス板の片面に金属を真空蒸着させて作られるダイクロガラスを素材に、ベースとなるガラスの色と金属の組み合わせを変えることで、様々な色が作られる技術を巧みに用いています。ミラーの中では、映し出されるものが異なる色で幾重にも重なった像として浮かび上がり、見る人に幻想的な感覚を与えてくれます。

Brera Design Districtは、世界的に名の知れたブランドが集まる地区。歩道にもインスタレーションが設置され、狭い道には歩行者の波、道沿いのショップもカフェも熱気に満ちています。このような光景を見ると、MILANO DESIGN WEEKがミラノ市へもたらす好影響を実感せざるを得ません。

数多くあるイベントの中でも大きな話題となったのは、「軽やかさ」をテーマにしたHermès Maisonのエキシビジョンです。戦後にPetola競技場として建設されたパレルモ通りにある巨大な空間の中に、給水塔からインスピレーションを得た形状の、木枠と和紙から構成された色鮮やかな４つのパビリオンが並びます。レザー小物、セラミック製テーブルウェアなどのブランドの新作、キルティングやパッチワークを駆使した柔らかなカシミヤのベッドカバーやブランケットの斬新なカラーパレットも新鮮です。リサイクル紙を重ねた展示台を含め、パビリオンを構成するすべての素材がリサイクルされるそうです。

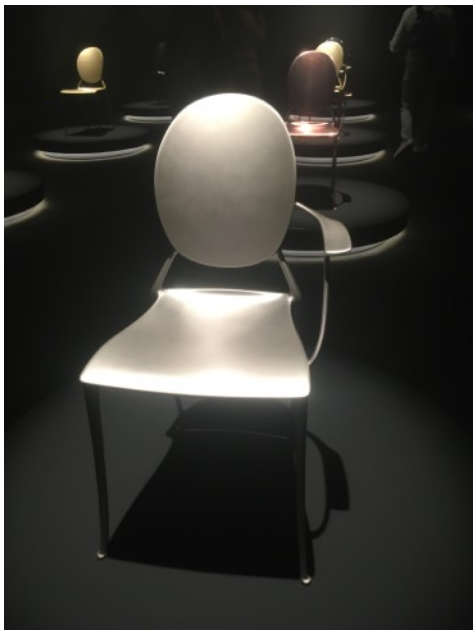
もう一つのビッグなエキシビジョンは、ブレラ通りのCitterio宮殿内で開催されたChristian Diorのインスタレーションです。Diorが愛するルイ16世様式のメダリオンチェアを、Philippe Starckがとことんまでミニマルなシルエットにリデザインして生まれた「Miss Dior」。真っ暗な空間で、ドライアイスが立ち込める中「Miss Dior」のロゴが浮き上がり、サティのメロディに合わせ、バージョンの異なる20脚ほどの「Miss Dior」がリズミカルにスポットライトを浴びます。イタリアで製作されたアルミ製のチェアは、光沢仕上げのブラックやピンクがかった銅色など気品のある色彩を纏い、両サイドに肘掛があるもの、一方だけのもの、肘掛のないバージョン、と3種類のデザインで展開されています。どれもそれぞれに美



撮影 DROP OF LEMON

WWW.DOMUSWEB.IT

Hermès Maisonのインスタレーション。



「Miss Dior」膝掛１つ、シルバー光沢仕上げバージョン。

撮影 ARSHAM STUDIO KOHLER

「Divided Layers」手前の黒い部分が水の鏡。滑らかな表面が周囲を映し出しています。

しい、Philippe Starckが「女性らしさ」へ捧げるオマージュです。エキシビジョンを後にし、メインエントランスとは逆方向へ案内され、宮殿の建物の内側に広がる庭園を楽しみながら会場を出ました。

2022年フォーリサローネアワードにノミネートされた20イベントの中から、コミュニティが選んだベストワンは、Senato宮殿で行われた「Divided Layers」。バス＆キッチン・ブランドKohler社とアーティストDaniel Arshamのコラボレーションによるインスタレーションです。7枚の白いパネルと水の上に浮かぶランウェイは、アーティストが昨年Kohler社とコラボレーションした、3Dプリンターの洗面台「Rock.01」が出発点。白いトンネルの中を歩きながら、来場者に層の重なり合いを体験してもらおうという意図が含まれています。白いトンネルを抜けると、周囲の景観を映し出す水の鏡が目の前に飛び込んできます。無機質なインスタレーションと長い年月を経た歴史的な建造物とのコントラストが絶妙です。

多くのクリエーターが、コロナ禍の中で蓄えたエネルギーを創造活動に注ぎ込み、新しい発想、視点、素材、技術を駆使して、これまでとは一線を画した作品を創り出しています。明らかに、ものづくりの方向性が大きく変化しています。そして、世界中の多くの出展企業と来場者がミラノをデザインのメッカと捉え、MILANO DESIGN WEEKへ参加したことは、ミラノ市の産学官が一体となって、地道に積み重ねてきた努力の結果と言えます。来年の開催は、2023年4月18日から23日です。

執筆者 略歴

池田美雪 インテリアデザイナー
武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒
Istituto Europeo di Design 建築インテリア科卒

1994年よりミラノ在住 個人邸の改築、パブリックスペースの設計に携わったのち
2005年より クリエイティブ・コンサルティング会社（デジタルゲーム、ウェブサイト、グラフィックデザイン、アプリ) の共同経営者として活動

デザイン・アートに関するプロジェクトコーディネイト、翻訳および通訳
mikeda.it